



IC たより

公益社団法人 国際 IC 日本協会機関紙

発行年月日 2014年12月22日
発行所 公益社団法人 国際 IC 日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-28-20
バシ・エテルネル 206号
TEL: 03-6273-1428 FAX: 03-6273-1429
E-Mail: info@jp.iofc.org
HP: www.jp.iofc.org

頒価 1部100円

16

Initiatives of Change Japan

8.25 ~ 30 主催: MRA/MRA/IC韓国本部 後援: 女性家族部

目次 INDEX

第11回東北アジア青年フォーラム
2014年コー IC 世界大会

IC インターンのタムさんの紹介
他



第11回東北アジア（日中韓）青年フォーラム開催8月

去る8月25日から30日まで、韓国政府の支援と韓国 MRA/IC の主催により「青少年の言語文化の現実とその改善方法を考える」のテーマの下に、第11回東北アジア（日中韓）青年フォーラムが開催されました。日本からは、12大学からの19名、そして日本で学ぶ中国からの留学生1名が参加し、中国からの24名、韓国からの40名の学生たちと共に、設定されたテーマのみならず、日中韓の問題についても真摯に意見交換を行い、参加者同士に深い友情が築かれました。又、弊協会の矢野弘典会長、会員の住友裕郎氏も参加しました。日本の参加者の感想を一部紹介します。



▲分科会の様子

『中韓への考えが大きく変わったフォーラム』

慶應義塾大学2年生 野渡 駿

「このフォーラムは、自分の人生観、価値観の形成に多大な影響をもたらすものでした。まず第一に、私は参加以前には中国人そして韓国人に対して少し歪んだイメージを持っていました。しかし、開会式を経て、私の姿勢は大幅に変わりました。各国が日中韓の関係を憂慮していて、関係改善の第一歩としての側面がこのフォーラムにあると聞いた時、私は自分の身が俄に引き締まったように感じました。少なくともこのフォーラムの参加者は、お互いの国や、考えを理解しようとしている人たちなんだと思うと、当初に感じていた恐怖心が和らぎ、代わりに広い心で、冷静に、真剣に彼らと向き合う心構えが出来たように思います。各国の参加者は、皆、冷静でした。深刻な歴史的問題について議論するときも感情的にならず、相手への思いやりを常に忘れませんでした。これは素晴らしいことだと思いました。各国には各国の事情があり、怒りや悲しみ、悔しさや罪悪感などの感情がある事を踏まえながらも、互いの気持ちを詳細に理解しようしたり、未来の事を考えたりする、理想的な関係がそこにありました。最初は日中韓、それぞれ多かれ少なかれお互いの国に対する誤解を持っていました。それは実際に互いに触れた事が無いならば仕方の無い事です。しかし活動を通して誤解を解いて、それぞれの考えを確認して、フォーラム参加者はそれぞれ国籍を越えて、そのような体験を身を以て共有した戦友として、心の深いところで結びついたように思います。私はこの活動を通して、中韓に対する考え、アジアの平和に対する考えが全く変わりました」

『友達を作って対話することの重要性を学んだフォーラム』

津田塾大学1年 江見 麻友子

「韓国人の女の子と同室になり、一人韓国に友達ができただけで、韓国自体に対するイメージも変わるもので、国同士では様々な問題を抱える日韓ではあるけれど、国に対するイメージをそのままその国で生活する人たち皆に一概に当てはめるべきではないと改めて強く感じた。

一番印象に残っているのは、彼女がナイトミーティングで三カ国の歴史認識について話し合った時、なぜ日本語を勉強しようと思ったか、という問いに対し、『国同士は様々な問題があっても仲が悪いかもしれない。でも、自分が日本語を勉強して少しでも状況をよくしていくことに貢献したい』と語ったことだ。彼女が少なからず抱いていた日本に対する誤解がとけたと言ってくれ、その後大きく私たちの間の隔たりがなくなった気がしたからだ。危険を伴う対話でも、勇気をもって積極的に参加してみる大切さも学んだ。もちろん、その時相手に対する思いやりを常に持つことも。私たちに大きな力はないけれど、この三カ国の中で今できることは、友達を作って対話すること、言語を学ぶこと、そしてお互いの国のことをもっと知ることではないだろうか。この経験を今後に生かすためにも、これからの残された大学生活の中で、自ら積極的に対話する姿勢を忘れないようにして、もっと勉強したいと強く思った」



▲朝鮮を対岸に望む仁川(ソウル)への訪問



▲独立記念館訪問



2014年 コー IC 世界会議レポート

本年も、6月30日から8月13日にかけてスイスのコー世界会議場で開かれた7つの会議に、国籍・人種・宗教・文化等の違いを超えて世界各国から人びとが集いました。欧州の課題、持続可能な農業への課題、又、世界各地での紛争等、世界が直面している問題の解決は私たち一人ひとりの在り方に掛っていること、又、どのように人と人、民族と民族、異なった宗教を信じる人々の間に、そして、国と国の間に信頼を築けるかということについても、参加者が体験を分かち合うと共に、様々なアイデアを発信しました。その会議の様子の一部をご紹介します。



▲左から、チャド、イスラエル、デンマーク、オーストラリアからの参加者

又、会議中の7月6日には、これまで世界各地で紛争解決と和解を築くために尽くしてきたICの働きが評価され、オッセイミ財団 (Osuseimi Foundation) より、かつてネルソン・マンデラ氏も授与されたという「プライズ・フォー・トレランス (忍耐と寛容さへの賞)」が、授与されました。(詳細は右 QR コードか下記 URL より)

<http://www.fondationousseimi.org/en/prize-for-tolerance/2014-initiatives-of-change-international/>



7月3日-14日「グローバル経済に於ける信頼と誠実さ」会議から

「利潤は手段(媒介)であり、究極目的ではない」 クリスチャン・フェーバー教授の講演の一部をご紹介します。

経済学者、そして作家でもあるクリスチャン・フェーバー教授(「公益のための経済」という理念の提唱者)が学生を対象に行ったある調査で、「経済市場の最終目的とは何だと考えるか?」と彼らに尋ねたところ、ほとんどが「お金、利益」と答えたとのことです。講演は、教授が聴衆に質問を投げかけ、それに聴衆が答えるという形式で進められました。「良き人間関係の根底にどのような価値が見出されるだろうか?」という質問には、前向きで肯定的な14の返答が聴衆から寄せられました。

教授は、成功した経済とは、人々により良い動機を与えることのできる価値観に基づくべきであり、それは良き人間関係を基盤とするものであることを強調しました。又、経済システムの論理的ゴールは「共通の利益(公益)」であるべきだと指摘しました。その一例として「企業や個人の経済活動の自由は、『共通の利益(公益)』の範囲内で許されるものである」(コンビア憲法)や、「全ての経済活動は公益のために為されなければならない」(バイエルン自由国憲法)を挙げました。次に教授は聴衆に、「経済競争の結果が、人間の行動に与える影響とは何か?」と尋ねたところ、肯定的なものではなく否定的なもの、例えば利己心、貪欲、支配、搾取などの例が挙げられました。そこで教授は、経済的利益や競争ではなく共通の利益(公益)と協調を目指す経済モデルを提唱しました。教授は過去に僅か3年間しか機能しなかった共同福祉システムを例に挙げ、たとえ市場経済が効率的であったとしても必ずしも効果的であるとは言えず、最大の問題はその制限なき在り方によってもたらされる市場の過度の集中化であると指摘しました。講演の最後には、自らが提唱した社会運動「共通の利益(公益)のための経済」に触れ、その理念に共鳴する企業1670社や先端企業200社、そしてエネルギー産業やコンサルタント企業100社の支援を受けて運動は成長しつつあると語りました。そしてそれは政治運動のように人々に要求するのではなく、むしろ鼓舞するための内なる運動であると述べました。経済的成功と倫理的立場は両立しうるものであるという新しいルール確立こそがフェーバー教授の目指すゴールです。

クリスチャン・フェーバー教授 (Christian Felber, 経済・社会学者。"Economy for the Common Good" 提唱者。 <https://www.ecogood.org/>)

7月12日-17日「人間の安全保障のための公正なガバナンス(統治)」会議より

この公正なガバナンスをテーマとした会議では、「世界各地での紛争から和解への解決への道筋で、信頼関係の立て直しのためには、正にコーが発信している、一人ひとりの在り方を正しいものにしていくことから信頼関係を築いて行くことが唯一の解決策で、それなしには社会のあらゆる分野で、必要とされているリーダーシップも発揮されない」とジュネーブの国連本部から参加したミッシェル・モラー事務総長代行が語りました。





7月26日-8月1日 「子供たちが社会を変えるために果たせる役割」会議

この会議には、南米のペルーや欧州のハンガリー、クロアチアなど、世界中から多くの子供達が集まりました。ペルーのNGOによるストリート・チュドレンへの支援に積極的に係ってきた子供たちの活動報告や、子供たちが自分たちを守るための人権を学ぶ上で、いかに大人が子供達の声に耳を傾けることが大切かなどの発表もされました。又、子供たちが親と一緒に参加するワークショップも開かれました。



日本から参加された豊田直子さんは、「今夏、小学3年の息子とコーを訪ねました。息子は初めての海外旅行。私は10年以上ぶりの海外。英語が全く話せない息子と私だけでは不安が先行。そこでコーに数回訪問経験のある母に同行願い、晴れて親子3世代での参加が叶いました。親子プログラム“子供たちが社会を変えるために果たせる役割 Children as Actors for Transforming Society (CATS)”では、様々な分科会があり、息子は6～10歳のプログラムとシアター・グループに入り、ゲームや劇を通じ、多国籍多言語多人数種ハンディキャップの子どもたちと親睦を深めました。1日目の午前中こそ緊張一杯で母や私の後ろにいたものの、午後には『来なくていいよ』と通訳なしで終日遊んでいました。幼い子供たちは、まだ母国語しか話せない子が多く、それぞれ仏・英・独・スワヒリ・スペイン・日本語等で一方的に話しても、意思の疎通が確実に図れていたのは驚きでした。特に仏人の同い年の男の子と仲良くなり『仏語を勉強する』と張り切っています。言葉は拙くても、心を通わせたい気持ちがあればコミュニケーションが取れることを実体験出来たことは、自信と今後の糧になると確信した滞在となりました。息子は来年も参加する気満々でいます」と述べられました。



▲今年CATS会議に参加された豊田直子さんとお祖母様の矢野景子さんが来年の会議のポスターに

を勉強する』と張り切っています。言葉は拙くても、心を通わせたい気持ちがあればコミュニケーションが取れることを実体験出来たことは、自信と今後の糧になると確信した滞在となりました。息子は来年も参加する気満々でいます」と述べられました。

他にも次のような会議が開催されました

- 6月30日-7月4日 「土地と安全に対するコー・ダイアログ」
— 貧困と紛争、そして土地の劣化の関連を考える
- 7月20日-24日 「インスピレーション（ひらめき）の種」
— 私たちの命を形作るインスピレーションについて分かち合う
- 8月3日-8日 「多文化世界に生きる」
— 社会のつながりを強めるための新機軸と行動
- 8月10日-13日 「平和を築く人たちの国際フォーラム」
— 個人の変革と組織の変革を連結させる



ベトナムからのICインターン、タムさんの活躍

ICインターンとしてベトナムから招へいたパン・タントムさんは、去る9月26日から10月20日まで、学校での講演や、多くの青年達とのミーティング等で自分の人生での貴重な体験を分かち合ってくださいました。ICオフィスで行われたIC交流会でのお話しを紹介いたします。

「私は1985年に3人兄弟の長女として農業を営んでいた両親のもとに生まれました。しかし、生まれて直ぐに、家の隣に住んでいた独身で子供のいなかった父の姉に養子として引き取られました。それからは数学教師をしていた伯母が、私の母親であり父親となったのです。伯母は壁に世界地図を貼って、私に色々な国の首都や人口を尋ねたりすると共に、様々なことを教えてくれました。しかし、独身だった伯母の将来を案じた私の祖母が、私が13歳の時にベトナム系アメリカ人と伯母の結婚を決めました。伯母の意に沿わない結婚でしたが、祖母には逆らえず、伯母はアメリカに旅立ちました。そして、残された私は突然、実の家族のもとに戻るようになったのです。しかし、10代の難しい時期に、今までの文化的な雰囲気の違いと漂う環境とはまったく違う、農業を営む両親と、いままで一緒に過ごしたことがない弟・妹といきなり暮らし始めるのは容易ではありませんでした。学校から帰ると直ぐに自分の部屋に閉じこもってしまいました。又、成績も良かった私は学校では友人たちにいつも笑みを絶やさないような子供で、家にいる時とはまったく違い、まさに仮面をかぶっていました。又、子供の数は一人か二人が良いとされていた時代、三人兄弟だと知られるのを恥じ、妹のことをいとこだと偽っていました。又、貧しい家庭を恥じ、友達に家を聞かれた時には、自分の家よりもっと大きな家だった祖父母の家を指さしました。そんな私が、15歳の時、重いデング熱に掛り、父が大汗をかきながら私を背負って病院に駆け込んでくれました。両親とお医者さんが、今晚が山だと話し合っているのが聞こえた私は、死への恐怖から泣きぐずりました。

奇跡的に助かった私に初めて両親を愛するという気持ちが生まれましたが、でもそれを表現はしませんでした。大学3年生の時、台湾の劉仁州さん（IC専従）に出会いました。私が17歳の時に自殺をした別の叔母のことで自分を責めていたことを、彼は、「それは、あくまで叔母さんの選択であり、あなたが罪悪感をもつ必要はない」と言ってくれ、心が救われた気がしました。

その直ぐ後、ICの青年リーダーシップ育成プログラムである、アクション・フォー・ライフ（AFL）のグループが自分の大学を訪問した際、彼らの話を聞き、とても感銘を受けました。次のアクション・フォー・ライフのプログラムに自分も是非、参加したいと強く思いました。大学を卒業して、デンマークの大きな船会社に勤め、デンマークでの研修の話ももらっていた時に、次のアクション・フォー・ライフに参るチャンスが来ました。恵まれた待遇の会社生活を投げ打ち、ボランティアの活動であるアクション・フォー・ライフに参加することには両親も周りの人々も反対でした。しかし、この決心は自分のこれまでの決心の中でも最高のものだと今でも思っています。インドでの研修の中で、劉仁州さんが行った「ファミリー・ワークショップ」には、両親に手紙を書くというセッションがありました。いままで色々な嘘をつき、両親を恥じていたことを正直に父に手紙で伝えようと思いました。しかし、それは容易ではなく、何週間も苦悩した末に、ある朝、今書かなかつたら今後も絶対に書けないと感じ手紙を書いたのです。その中で、「何故生まれたばかりの自分を捨てて養子に出すようなことをしたのか」ということも尋ねました。ただ、無口でプライドの高い父から返事は来ないだろうとも思っていました。

しかし、アクション・フォー・ライフのフィールドワークでインドネシアにいる時、父からメールが届いたのです。ドキドキしながら読んだメールの中で、父は、「全家族のために自分を捧げていた姉にむくいるためには、自分たちは決して望んではいなかったが、お前を養子に差し出す事しか出来なかったのだ」と書き、その他にも色々と心情を綴ってくれました。泣きながら読んだそのメールをきっかけに父との関係は深くなり、ベトナムに帰ったときに、親しげに話す私と父の間に何があったのかと家族がいづかるほどでした。貧しい家庭に生まれた私にとって、お金は今も重要です。しかし、それが人生の最重要な事柄ではなくなりました。自分をより知ることができるようになり、そして、他の人々にこの場所を使うことを教えてくれたICに感謝しています」

日本をより好きになって帰ってくれたタムさんは、今後もベトナムと日本の良き架け橋として活躍してくれることでしょう。（尚、このインターンシッププログラムには、一般財団法人MRAハウスからご助成を頂きました。ここに改めてお礼申し上げます）



▲タムさんを囲んで

2015年度の国内外での主なプログラムです。
詳しい情報につきましては、IC事務局にお問い合わせください。

2月 インド「良き統治と信頼構築」会議（於：インド）2月24日～28日
良き統治とは政府のみでは成り立たず市民の在り方に大きく依存します。高潔さとビジョン、そして勇気をもった人々こそが良き統治を組織でき、換言すれば、最良の組織でさえも市民が関心を払わなければ腐敗してしまいます。インド・パンチガーニのICセンターで開催されるこの会議への日本からの参加者を募集いたします。

5月～6月 学校訪問プログラム
本年も学校を訪れ、児童や学生の国際理解の促進と心の成長を支援するため、海外からの青年ボランティアに日本の青年を加えて行います。

6月19日～21日 第37回IC国際フォーラム
海外からの代表や、日本在住の留学生や外国人を交え、世界の状況を学びあうと共に、ICの基本的な考え方である、先ず自分自身をより良く変え、社会の変革につなげるための方法を実際の体験例を交換しながら学ぶための第37回IC国際フォーラムを開催します。

6月～8月 スイス・コー国際会議（於：スイス）
コーでは世界の人々と出会い、マスコミの報道等では知りえない各国の現状をつぶさに学べます。又、ICの精神を共有する各国の人々との深く深いネットワークを結ぶことができます。この会議への日本からの参加者を募集いたします。

8月 第12回東北アジア（日中韓）青年フォーラム（於：韓国）
2004年より韓国MRA/ICが主催し昨年まで11回開催しました。日本からも毎年20名前後の大学生、大学院生が参加してきました。本年もこのフォーラムに約20名の青年・大学生の参加者を募ります。

8月 第21回アジア・太平洋青年会議（於：カンボジア）
アジア太平洋地域を中心とした青年達の相互理解と、将来へ向けての友情を育む事を目的としています。青年・大学生の参加者を募ります。

★ニュース短信

インドのICセンター、アジア・プラトーの日本庭園の改造

が模索されていましたが、このほどインドICにより本格的な日本庭園に見事に造り替えられました。左写真をご覧ください。

@編集後記

本年も個人、そして法人会員を始めとした多くの皆様の支援をもちまして様々な事業を行うことができました。心よりお礼申し上げます。来年も6月19日から21日まで第37回IC国際フォーラムを開催するのを始め、多様な事業を通してより良い社会、そして平和な世界作りのために貢献していきたいと存じます。どうぞ皆様もお元気で良い新年をお迎えください。（編集委員：岡本 さくら、兼松 恵、長野 清志、中山 啓介、弓場 睦）

